

設立30周年記念号

會報 善 哉

令和7年9月1日 第61号



曾屋水道記念碑の裏面には、町の発展に尽力した先人たちの名前が刻まれている

NP0 法人 秦野歴史おこしの会



秦野市長 高橋昌和

秦野歴史おこしの会におかれましては、平成六年の発足以来、本市の歴史を明らかにし、史実を掘り起こして、後世に残し、まちづくりに進んで貢献されるなど、本市の歴史遺産を守り伝える活動を長年にわたり続けられ、昨年をもって、創立三十周年を迎えられましたことに、お祝いを申し上げますとともに、改めて深く敬意を表するものであります。

本市といたしましては、令和七年一月一日に、市制施行七十周年を迎えたところですが、本市の礎を築いてこられた先人たちのたゆまぬ努力に深く敬意を表し、これから八十周年、九十周年、百周年、そして、それ以降においても、

市民が誇りを持つて暮らせるまちであり続けられるよう、次代を見据えたまちづくりを進めていくところでございます。

市内では、長い歴史の中で失われてしまう歴史遺産もあります。特に建造物は、建て替えや開発で姿を消してしまうことが多く、後世に引き継ぐことが難しいものの一つです。そのような中にある、本市では、市内に所在する文化財の指定をするとともに、歴史的建造物の保護と継承がされるよう取り組み、江戸時代に建てられた寺院建築や昭和初期の商店が国の登録有形文化財への登録がされています。また、近代水道の遺跡として明治時代の半ばに竣工した「曾屋水道」の遺構や、関東大震災の地震の規模の大きさを今日に伝え、歴史的に貴重な価値を兼ね備えた地質遺産である「震生湖」が国登録記念物に登録され、貴重な歴史遺産であるとともに、大切な地域資源としての活用に使っているところです。

昭和期に活躍した俳人・中村草田男の俳句に「降る雪や明治は遠くなりにけり」という句があります。すでに昭和や平成も「遠くなりにけり」と感じる方もおられるかと思いますが、昭和、平成も歴史の一ページとなり、また、私たちが今生きる令和も、いずれは歴史の仲間入りをしていくものでございます。

新しい時代、また、次代に向けて、本市においても、歴史や自然といった地域の風土に根ざし、豊かな市民文化を感じる事ができるまちづくりを進めることが大切です。これから秦野歴史おこしの会の皆様方と手を携えて、地域の歴史遺産の保護と継承、そしてまちづくりのための活用に取り組んでまいりたいと思っております。

結びに、秦野歴史おこしの会の益々のご発展と会員の皆様方のご活躍を祈念申し上げ、私からのあいさつとさせていただきます。

三十年の歴史を振り返って



理事長 小泉 孝

久しぶりに過去の会報「善哉」を読み返していると、平成十年第七号の記事に私の顔写真を見つけました。どうしてもと乞われて入会と同時に事務局長に就任した時のものです。初代理事長山田弘三氏、二代目高橋登氏、三代目杉崎正二氏と続き、それぞれの個性を持っていた各氏の後を引き継ぎ、現在私が四代目の理事長を務めているところです。それぞれの理事長の下、会員の皆様の相互の協力により現在に至っているものと確信しております。

私が生まれたのは昭和二十年四月、日本が敗戦を迎える直前の時のことです。正に戦後八十年を生きてきた証人の一人なのです。今年が当市創立七十年、はたまた昭和百年に当たる歴史のめぐりあわせの中で、当会の三十周年を祝うことに驚いています。

私を育んでもらった郷土秦野に限りなき感謝をささげるとともに、いとおしい気持ちでいっぱいです。限りなく続く歴史

史の中の今この一瞬に生きている現実を見つめています。私が十歳の時に町村合併がなされ、秦野市が誕生しました。そのとき、北小学校の児童全員で、まだ田園風景の残る北地区を日の丸の小旗を手にしながら巡った記憶があります。あれから七十年、歳月は夢のように流れ、あらゆる面で良くも悪くも翻弄されながら生きてきたような気がしています。

長い歴史の中では、予期せぬことや突如価値観の変化に戸惑うことがあります。その中で象徴的な出来事の一つにコロナ禍の発生がありました。世界的な流行の中で、日本もその例外ではありませんでした。ご存じのように、約五年間当会も休止に近い状況に追い込まれました。この時に人類発生より以前からウイルスが存在したことや、百年前のスペイン風邪の世界的大流行で多くの死者が発生したことなども学びました。

会の発足以来課題となっていた特定非営利活動法人(NPO法人)について、令和四年四月に苦心を重ねた末、神奈川県当局より認可取得ができました。その後コロナ禍も収まり始めたところから、今まで以上に会の結束と活気が表に現れてきたような感じがしております。NPO法人取得を機に、これからも市民とともに秦野の歴史、文化を学びつつ、郷土秦野の街づくりに貢献してゆきたいと念願しております。

近年特に印象に残っていることをいくつか挙げておきたいと思います。桐生海

正氏(現在足柄高校教諭)の講演をきっかけとして、漆に関わる話題がいろいろな面に波及して思わぬ展開を見せたことにはびっくりしました。そして『掘る女』の映画上映にあたりましては、当会の存在を市民に知らしめることができたという面から評価できるものと思っています。また、保谷徹氏に講演をお願いするにあたって、東京大学史料編纂所をお訪ねしたことも忘れられない思い出です。

私的なことを加えさせていただきますと、七十三歳から始めた古文書の学習は、文書の読み解きはもとより、併せて江戸時代の郷土の歴史を学ぶことができたことを人生の中で大きな収穫と感じています。講師の矢内昭夫氏には、当会にも協力をいただいております。今まで、多くの人との出会いに感謝するばかりです。

これからますます重要度を増すとみられるのは、文化財の維持保存です。今でも市指定文化財はたくさんあります。その中でも当市を代表する蓑毛大日堂内の文化財をはじめとして、数多くの文化財をどう護つていったらよいのか、いろいろな課題はありますが、官民の相互協力が是非とも必要と思います。種々の仕組みを考えてゆきたいものです。

郷土秦野の歴史・文化の継承を念頭に、これからの当会の活動の中で、新たな挑戦にも対応できる土壌を作ってゆきたいと思っています。

最後に、会員の皆様のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。

思い出のひとつ

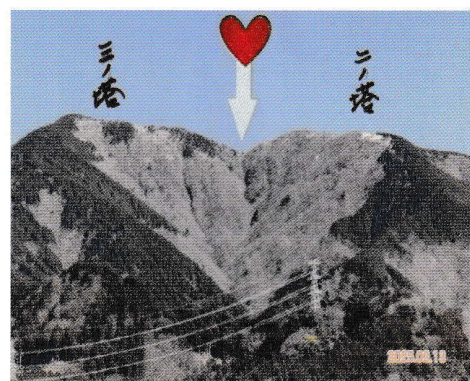
会に加入しての思い出、そして今

戸口あや子

あれは九年前のことでした。風の便りで歴史おこしの会での見学バスツアーがあることを知りました。参加希望をお伝えすると、小泉理事長が「どうぞ、どうぞ」とやさしいお誘い。しかし「会に入会すればね」と厳しいお言葉。すぐに会費をお支払いしました。

最初は「茅ヶ崎方面の大岡越前守一族墓所めぐり」だったと記憶しております。それが私と会の始まりです。その後、各理事の提案で、秦野市内及び近隣の旅で学ぶことができ、私の人生において、とても良かったと思っています。それから古文書の学習にもお誘いいただき、古文書より歴史を学び、歴史から古文書を読み解き、次から次へと関連した項目につながり、人生の上で最高の楽しみと思っております。

当会は、名前の通り歴史を掘り起こし、それぞれの視野にて意見を出し合い、研究していくのがベストかと思えます。相手を思いやり、お互い様という気持ちでこれからも参加していきたいと思っています。御指導の程よろしくお願いいたします。



丹沢の二つの塔の間には
勇気わき出るハートのマーク

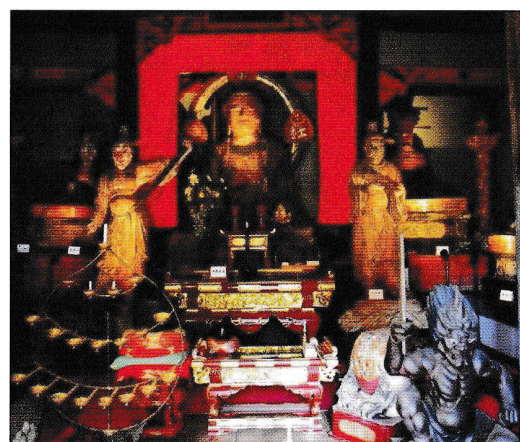
近くの渋沢丘陵より丹沢をながめながら。勇気をいただいたいております。

養毛閻魔堂での感動

菅野一三

地方から出てきて秦野を永住の地としたのは、二十数年前のことです。地域に住んでいる人はどんな生活をし、当地にはどんな歴史があるのだろうかなど、早く理解して地域の人とうまくやっていきたいという気持ち、それが当会への入会の動機でした。

当会活動で初めて養毛大日堂の閻魔堂を訪れた時の感動は、今でも忘れません。還暦を迎えて生と死について関心を持った時期だったと思います。兄弟の死や法要など一通りの経験をしてきました。そしてぼんやりと死後の世界を想像していました。そういう気持ちがあつてか、御堂に入った瞬間、目



地獄の十王の中心では、地藏菩薩が見守っている

にした光景の異様さに圧倒されました。人が死後に赴く冥途の世界、生前の所業について十人の地獄の王によって裁きを受けるといふ。そして、六道のどこへ生まれ変わるかを決められるという。薄暗い堂内の雰囲気の中で十王が睨んでいる。そして閻魔大王の目が光り、何とも表現のしようがない空間の中で、一人不気味さを感じ、身が引き締まる思いになりました。今を生きている自分が問われている。しっかりと生きようと、思いを新たにしたいことを覚えていきます。

歴史おこしの会に入会し、いろいろな活動に参加してきましたが、歴史は学びの喜びを与えてくれます。そして温かく私たちを見守ってくれます。今後、後にも大事にしていきたいです。

曾屋水道のこと

横溝 彰

曾屋水道の竣工は明治二十三年であるから、今年は百三十五周年にあたる。三十年前、転勤先である広島の本書肆で「幕末の鬼才・三浦乾也」という本の目次を見て驚いた。『陶工復活と曾屋水道』の項目が飛び込んできたからだ。

その後、東京・大阪・名古屋と転勤を重ねて十一年前に秦野に戻った。翌年、市制施行六十周年企画の一環で私は収集した日本各地の古い通い徳利を並べて、「秦野名水・酒文化と通い徳利展」を文化会館で開催。その際の来場者名簿に、歴史おこしの会の会員の名前が数名確認できる。中の一人が現・小泉理事長で、歴史おこしの会を紹介され現在に至っている。秦野を離れていたからこそわかる故郷秦野の水のおいしさとその環境の維持が大切と考え活動が続けている。



本年の十一月には秦野で名水サミットが開催される。そこで、冒頭の曾屋水道の経緯を辿ることが大切と理事の皆さんのご理解を頂き「曾屋水道と常滑焼」の講演会を企画、親交のあるとこなめ陶の森資料館の小栗学芸員に講師をお願いした。

曾屋水道について特に触れたいのは、明治十年代の変革期における自治的文化的精神の結晶であるということ。理由は水道事業を提案・推進した人たちの背景にある。当時の曾屋村を包含した相州地区は自由民権運動、キリスト教の伝道活動、悪疫流行対応の衛生会さらには資産家・事業家の利他主義が地域の皆さんに浸透して、民営水道の嚆矢となったことに着目すべきである。

滝の沢不動尊の祭典

古谷信行

毎年四月十七日に近い日曜日に菩提地区の人々により滝の沢不動尊の祭典が行われている。この祭典がいつ頃から始まったかは定かでないが、滝の沢不動尊の由来によると、江戸時代中期からで、昭和の中頃までは不動尊の境内で「火伏せ祭」が古式に則り行われ、螺貝が響き渡り修験者が呪文を唱え、護摩壇の火が積まれた薪に移され



滝の沢不動尊の祭典の時に立てる幟旗

火が下火になった頃、修験者が素足で渡ると見守っていた参詣者が後に続いて渡り、無病息災を祈った。また、燃え残った炭を家に持ち帰り火難除けにした。近くのお祭り広場では、村人が料理や酒を持ち寄り桜の下で一日楽しく過ごした。

昭和の中頃を過ぎると高度経済成長期になり、祭りの様子も変わり、自治会が中心となり参道整備を兼ねた参詣となり、その後会長宅で直会を行っていたが、昭和六十年滝の沢保存会が発足し、祭典も各地区の代表が自治会館に集まり定源寺住職が祈祷を行い、その後滝の沢不動尊、及び菩提各地区の山神様も参詣するようになった。滝の沢不動尊の祭典の時に丹沢橋近くに幟旗を立て祭典を祝っているが、この旗は平成二十五年に古くなったものを作り替えた。地域の伝統である祭典が長く続くことを願ってやまない。

「秦野歴史おこしの会」に入会して

安部知佐子

令和元年に入会しました。

今まで参加した中で印象に残っているのは、令和六年十月に「源実朝公ゆかり鎌倉さんぽ」のバス研修です。初めての参加でしたが、田谷の洞窟(?)の名を全く知りませんでした。ご住職のユーモアたつぷりの分かり易い解説を聞き、ローソクを手燭台に灯し、いざ洞窟へ。洞窟の中にあった、修行僧が石にノミで一彫り一彫り心を込めて彫った石仏を見てみると、心が洗われるようでした。ノミで彫った痕も残っていて、感慨深かったです。灯明は持ち帰り、手を合わせて灯りが尽きるまで見届けました。



箱根の阿弥陀寺にて
(前列右から2人めが私)

今年三月に参拝しました箱根の阿弥陀寺のご住職、賢世和尚の信念と情熱に心惹かれました。参道を何年もかけて切り拓いたとのこと、五十七歳で琵琶を始め、六十七歳で「日本琵琶コンクール」で一位に輝いたこと、しかも八十歳を超しておられるのに力強い声での琵琶説法等々、只々驚くばかりでした。

いろいろ参加させていただきましたが、会員の皆様の知識の深さに感嘆するとともに、少しずつ少しずつ勉強していきたいと思えます。これからもよろしくお願いいたします。

実朝公五輪塔と秦野

小澤恵一

当会の設立三十年おめでとうございます。市民団体で三十年も活動が続いているのは、非常に稀有な団体だと思えます。発会以来ご苦労された会員諸先輩の皆様、ありがとうございます。歴史好きの私、サラリーマン定年後何か地域での活動を求め、当会に入会して十年余りです。会の活動、特に講演会と研修会を楽しみにしています。

東田原にある「曹洞宗金剛寺と源実朝公の首塚」が二〇二二年度NHK大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」四十五回(口)の放映で、実朝公ゆかりの寺とし



御首塚の木造五輪塔

次のように、紹介されました。

「神奈川県秦野市、行方不明になった実朝の首が、この地に葬られたと伝わっている」として、ふるさと公園のコスモスと石造の五輪塔が映し出されました。また、「首塚にほど近い金剛寺、この寺に伝わる木造阿弥陀三尊像は実朝を供養するために建立されたものと考えられている」このように紹介されたことで、秦野市の名が、全国的に知れ渡りました。私たち秦野市民にとって名誉なことです。

また鎌倉国宝館に常時展示されている実朝公の「木造五輪塔」の説明文にも鎌倉時代(作)所蔵金剛寺とあり、武常晴や退耕行勇の名も明記されております。

当会でも、昨年度研修会で鎌倉国宝館を訪れ木造五輪塔を拝観し、学芸員より説明を受け、見識を高めてきました。それは予想以上に大きく、素朴で

実に迫力のあるものでした。

私も、実朝公の御首や金剛寺の木造阿弥陀三尊像がどのようなようにして、秦野の地に祀られたのかを調べ、当会の活動を通じて市民に、全国にしっかりと伝える事への誇りとやりがいを感じながら、活動が続けて行きたいと感じています。

歌碑・句碑への憧憬

窪嶋義文

設立三十周年おめでとうございます。私と会との関わりは、退職後、二代目の本町公民館長に赴任した平成十年（一九九八年）四月に、小泉孝新事務局長（現理事長）から秦野の文化財保護や蓑毛の大日如来坐像等への強い思い入れをお聞きした時以来です。

それから三十年近い間、「善哉」を通して会に参加し、第五十五号（令和四年九月）に「前田夕暮歌碑建立記」（南小学校）を掲載された事が印象に残っております。

私の歌碑・句碑への憧憬は、西安、洛陽、曲阜や芭蕉、空穂、茂吉、一葉、実朝歌碑、山の辺の道等での碑を訪れた印象や建立経緯等を本町公民館の館報に掲載し、「秦野の歌碑めぐり」（平成十二年五月、本町公民館刊）に集約しました。以来、故古屋忠春先生直伝の

拓本と表装（掛け軸等）の技法を生かし、伊東市、下諏訪町、岐阜市等の「文学碑拓本コンクール」への応募や、明治・大正・昭和の掛け軸や巻物、般若心経、額装の修復も楽しんできました。

これからのデジタル時代、機材が無くとも読める和紙に回帰するという「原本」の保存が重視される中、作者や所有者の思いに触れつつ、折れ目、紙焼け、シミ、虫食い等を確認しながら和紙三枚の裏打ち紙を指先で剥がし、表装裂も新調した時の感動を生きがいにしていきたいと思っています。

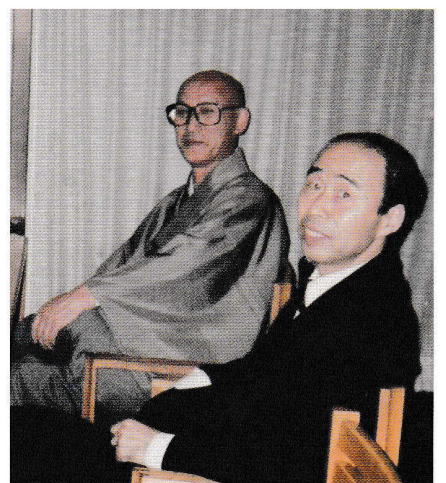


相模大山不動明王の手ぬぐいの自作表装

発足時の雑感

竹田民雄

歳月、人を待たずとあるように、秦野歴史おこしの会が設立されて三十周年を迎えるに至りました。当地に歴史おこしの会の組織を作る際、蓑毛山宝蓮寺前住職で、公益社団法人日本尺八連盟の都山流尺八奏者の東島光明三十三世（竹号東島素山）には、会員の募集、役員構成、役割、仕事の内容などの会



初代事務局長でもある東島光明氏（左）と私

の骨格作りにお骨折りいただき、初代の理事長に山田弘三氏になっていただきました。会員には、当初学校関係者が比較的多かったと思います。

先人の築いた文化遺産に接することによって、私達市民は大いなる心の糧を得てきました。更にこれらの遺産を護り子孫に伝えることができるよう、今後、市内の文化財調査、文化財保護支援、学習機会の提供及び広報啓発等の事業を実施し、特定非営利活動法人秦野歴史おこしの会として「まほろばの里秦野」のまちづくりに貢献していきたいと思っています。

今ここに三十周年を迎えたことは、秦野歴史おこしの会の世界を追求する人にせよ、単に歴史愛好者にとっても、和やかな会でありますようにと思っております。皆様の益々の歴史への理解と、御多幸を心よりお祈りいたします。

路傍の風習

— 盃状穴の謎 —

天野 賢一

盃状穴(はいじょうけつ)との出会い 三十年
 以上前に見た奈良・東大寺の転害門、その基壇に穿たれた多数の「窪み」が印象的で記憶に残っていた。それは「雨だれ石」などと呼ばれており、軒先から滴る雨水が長い年月をかけて石をも穿つという播鉢状の小さな窪みである。なんとなく腑に落ちなかったが、その時は深く探る事は無かった。その後も、発掘現場近くの神社参道に架かる太鼓橋でも穿たれているのを見つけ、雑談の中で先輩から「子供の頃、独楽の(鉄)芯棒を研ぐのに穴を使った」と、さらに別の場所では年配の女性から「子供の頃、石橋にある穴でヨモギを捏ねて遊んだ」などということを知っていた。その後も行く先々で気にしていると、様々な場所で発見することができた。大阪天満宮では滋賀の友人から、あちらこちらと所在する場所を教えてくれた。どうやら近江にも沢山あるようで彼もいろいろと調べているらしく、意気投合した。

これまでの研究 先行研究としては民俗学者の国分直一監修による「盃状穴考 その呪術的造形の追跡」が一九九〇年に刊行され、古墳石棺の蓋石に穿たれたものを「盃状穴」と命名していること。広義では先史時代から

存在し、日本のみならずアジア大陸・欧州に至るまで広く世界に分布すること、先史時代・古墳時代のもものを「一義的盃状穴」、中世・近代のもものを「二義的盃状穴」と区分する提案(三浦 一九九〇)があること、「凹穴(窪み穴)・「凹石」・「性穴」・「石盆」・「Cup Mark(カップマーク)」など呼称は多様であることなど、ある程度の謎は解けた。

近世・近代の盃状穴 これまで私が関心を抱いてきたのは前述で言う「二義的盃状穴」である。これについて近年とある勉強会仲間では話題になり、仲間たちは長年、自分と同じ疑問を感じており、「現時点での検討と評価の機会を持つ必要があるのではないか」という結論に達した。以後、数度の巡検と学習会を重ね、これまでの研究史・先行研究をきちんと踏まえること、地域的な広がりや正確な年代観を捉えること、そしてその意味を説明することなどの課題が挙げられ、「盃状穴調査ネットワーク」の結成と第一回シンポジウム開催となった。東京・山梨・神奈川のメンバーで構成されたシンポジウムでは、対象物の位置と年代を捉えその目的を探ること、調査を継続し情報の共有と成果の公開をはかることとした。

盃状穴の実態解明に向けて 盃状穴は人為的な行為の痕跡であるため、人が集中する場所に多く見受けられる。その意味を辿るには、その行為を行った人々や集団を把握する必

要がある。この人々とはいったい誰か。一定の地域集団がその地域内でその行為を行う場合、あるいは特定の人々が社寺参詣や霊場巡礼などを目的に、その道中で行為を行う場合が考えられる。盃状穴の分布とその所在地は、今後、調査の進展により明らかにされていくと考えられるが、私は近世の街道筋など人通りの多い場所に分布していると仮定している。神奈川県内の場合では、東海道及び矢倉沢往還や大山道・富士道などの各参詣道を基軸として、その沿線に所在する社寺域と参詣道の経路上に所在する道標や石造物などが挙げられる。また、秦野市内の各所においても、確認できる場所は多くある。

信仰と対象物 盃状穴の対象物として様々なものが見られるが、その主な対象の一つである道祖神と道標について着目したい。道祖神については多様な祭祀形態があること、道標については移動の目的などとの関係を考える必要がある。これら石造物に関する各自治体の調査報告などでは盃状穴に言及するものは極めて少なく、これらを基本とした再調査が望まれる。近世大山道は広大なネットワークとして関東平野を主体に広がっており、沿線には道標や灯籠などが設置され、それらにも盃状穴が見られる場合が多い。大山の道標は不動明王坐像を載せ、その下部に標示として各方面の銘文などが記載されているものがある。その代表的なものとして世

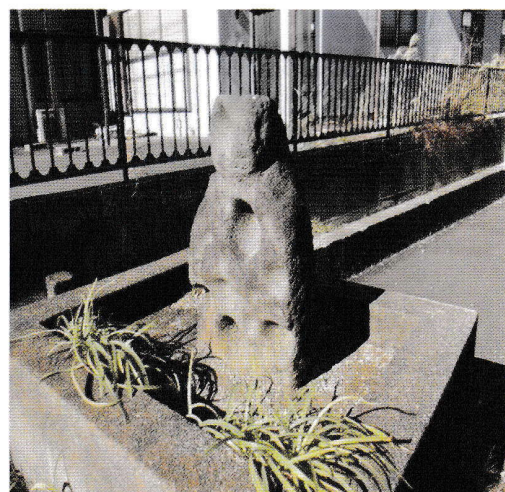


写真1 静岡県沼津市桃里中町
東海道路傍の石仏

田谷区太子堂二丁目所在の三軒茶屋駅出口付近に不動明王を載せた道標が挙げられる。この道標には基壇部の他、竿部にも複数の盃状穴が顕著に多数認められる。また、東海道の路傍では、沼津市に所在する道祖神と考えられる石仏(写真一)にはその原型を留めないまでに夥しく窪みが認められる。

盃状穴の盛衰と社会的な背景 なぜこれほどまで盛んに行われていたのか。その理由の一つとして信仰や祈願との関係性を考えたい。病平癒などで石仏に祈願すること、「まじない」によるもの(俗信的迷信)などの結果として形成されたものと想定したい。そしてなぜ衰退したのかも考えていく必要がある。例えば明治政府による宗教政策で民間信仰の否定と抑圧(神道国教化政策・神仏分離)や明治維新・文明開化を契機に、近代医学の発展と教育制度の充実により科学的根拠に乏しい

これまでの風習が廃れてしまったことなど、社会的な背景とその要因を探る必要がある。その衰退が急速なのか、緩やかなのか。また、伝承や断絶と再興、そして変化はなかったのか疑問点は多い。

課題と展望 先学によって聞き取り調査が行われている事例は多く得られているが、いずれも穴を利用した行為であって、実際に穴を穿った行為ではない。また形態も多様で、文字どおりの「盃状」を呈するものや「薬研状」のもの、さらには鋭利なもので施したような直線的で「切り込み型」と呼ばれるものもある。これら使用痕などの観察からその行為を把握できる可能性もあり、盃状穴そのものの詳細な観察・記録化が望まれる。そして各々の形態、対象物とその時間軸や分布を捉えていきたい。また民俗的な事例や伝承を集約する必要もある。それらを体系的にまとめ、その本質を捉え、総合的な評価ができることを期待したい。

その解明に向けて 霊場巡礼からの視点で考えてみると、類似する行為が伝承されているものがある。高知県室戸市に所在する四国八十八箇所霊場として著名な第二十四番札所の室戸山明星院最御崎寺では空海の七不思議といわれる「鐘石(かねいし)」と呼ばれる大きな石(斑瀈岩)がある(写真二)。小石で叩くと鐘のような音を発し、この音は冥途まで届くと言われている。多数の窪みと叩き石で



写真2 高知県室戸山明星院
最御崎寺 鐘石

ある小石が置かれ、多くの参詣者が叩いている。形態的には盃状穴であり解明に向けた手掛かりのひとつとなる可能性が考えられる。

主な引用・参考文献
稲田道彦 二〇一五「四国遍禮道指南 全訳註」講談社学術文庫

小川直之 一九九八「神奈川県道祖神祭」『レポート 大磯町郷土資料館だより』十七
国分直一監修 一九九〇「盃状穴考 その呪術的造形の追跡」慶友社

橋本好史 二〇二〇「海外の盃状穴」『伊勢郷土史草』伊勢郷土史会

橋本好史 二〇二一「日本の盃状穴」『伊勢郷土史草』伊勢郷土史会

三浦孝一 一九九〇「盃状穴考一播磨からの展望」『盃状穴考 その呪術的造形の追跡』慶友社

福田敏一 二〇二二「東京の道祖神塔辞典 その全記録と考察」雄山閣

令和七年度定期総会報告

高塚紀生

暦の上では立夏を迎えて新緑も眩しい五月十一日、本町公民館多目的ホールにて、「特定非営利活動法人秦野歴史おこしの会」の定期総会が開催されました。委任状を含む会員八十一名の出席により総会は成立、提出された全議案を審議し、多数可決により滞りなく終了いたしました。

令和六年度事業・収支決算報告では、市内外の視察研修や講演・学習会をはじめ、活動の詳細が報告されました。令和七年度事業計画案・予算案では、「会報『善哉』及び当会ホームページの充実を図り、秦野市内文化財の存在とその重要性について市民の意識を高め、「歴史の里秦野」のまちづくりに寄与するとともに、文化財に関する広報・啓発活動の推進を行う」を事業の活動方針として、会員・市民向けの活動を展開する報告がありました。特に昨年度が当会創立三十周年の節目に当たり、折しも今年は市政七十周年と重なること、市の記念事業として「全国報徳サミット」が秦野で開催されますが、今年度の当会市外研修会でも「二宮尊徳記念館の視察」が予定されており、報

徳普及の功労者である安居院庄七を輩出した秦野市民としては、どちらも興味尽きない企画です。

また十月の創立三十周年記念講演会では小栗康寛氏による「曾屋水道と常滑焼」の題目が予定されており、昨年の三武英行氏による講演会「三浦乾也と光西上人」とも関連が予想される内容で、既に明治中期には陶管による水道が敷設されていた当市にとって、これまた大変興味深いテーマになるものと思われまふ。

総会終了後は、平塚市博物館学芸員の早田旅人氏による講演が行われました。早田氏もご専門は報徳とのことですが、本日は「丹沢山地の環境と景観」



講演する早田旅人氏

の演題で講演が行われました。

戦国時代は戦争による略奪が生活の手段であったが、近世に入ると戦争が止み、領地開発に移行して生産に励む結果、人口が増えて経済成長を遂げた。一方で過剰な開発による村同士の争論が絶えなかった。これを善波村御運上と金目川上流域における入会山争論の史料・裁許絵図を題材に俯瞰・考察され、さらには『相中留恩記略』の絵図の写実性に着目されて、秦野各村の風景描写を追検証することにより考察を深めたという内容でした。

近世の相給知行により村の統治形態が複雑化したこと、また江戸に近い秦野は御運上山を抱え、それ以外の地域では入会制度の普及により必然的に原資が制限されたこと、その結果、複数の村々で権利関係の訴訟があったことは秦野市史にも書かれている通りですが、当時の争論を主軸に、秣場や森林生態への影響、景観や環境の様子の変化に着目され、考察されたことは非常に新鮮であり、宝永噴火や関東大震災などの大規模災害が少なからず生態系に影響を与えていることを差し引いても、大変興味深い内容でした。かく盛況の中、講演会は終了したことをご報告します。

秦野に唯一残っている

筒粥神事に参加して

戸口あや子

東地区東田原に、小正月の伝統行事で筒粥（つつがゆ）神事があります。米や麦、豆などの作物十二種類の豊凶と、その年の天気を占い、筒粥表を作成し、講中の人々に配布するものです。

令和七年一月十三日（月）、お天気に恵まれて東公民館の向かいにある自治会館で行われました神事に、特別参加させていただきました。講中の方にお伺いいたしましたところ、筒粥神事は富士講による行事で、以前は秦野市内に七か所の浅間神社があり、それぞれの地域で筒粥神事、月拝み、お祭りが行われていたと伝えられています。富士講とは、関東を中心に各地に広まり、



祝詞とお祓いで神事が始まる

江戸時代後期には盛んに行われ、明治大正、昭和と富士山を信仰する商人や農民が、町内や地域ごとに講を組織し、目的は毎年夏に富士登山をし、修行することでしたが、当時は富士登山には高額な費用が必要で、共同で資金を積み立て、交代で全員が登山できるように考慮されていました。

さあ、筒粥神事のスタートです。掛軸をかけ、富士山の神様が降臨くださるように祝詞、お祓いをします。祭壇には、お米、お酒、あずき、塩がお供えされ、青竹で作った十二本の筒が並びます。そして別室に移り、部屋には囲炉裏に赤々と薪が炊かれ、鉄鍋の中に米、あずきと、一月から十二月の印が刻まれた青竹十二本が連結して入っています。ぐずぐずと煮ながら十一種類の祝詞を拝読し、三十分ぐらいでし



竹筒を割り米粒を数えて豊凶を占う

ようか、米の煮え具合を見て塩でパツと味付けします。煮上がったところでお釜から竹筒を取り出し、竹を一本ずつ割り、中に入った米粒の数で占います。他の地区では見られない葉たばこの豊凶を占うのも特徴とのことでした。

次にお粥を炊いた薪の燃え殻を十二本並べ、天気を占います。白色は天（晴）、黒色は雨、薄黒色は半天（曇）です。どうぞ、写真の筒粥表をご覧ください。そして別室に移り直会（なおらい）に入ります。今年は粥を例年の二倍作りましたので安心して召し上がってくださいとのこと。ほのかな塩味で、とてもおいしく二皿ペロツといただきました。

この行事も平成二十一年に一度途絶えたことがありましたが、平成二十



薪の燃え殻の色で天気を占う

浅間大神 筒粥表

わ	せ	三	ト	一	月	天
中	て	五	ト	二	月	天
お	く	六	ト	三	月	天
大	麦	五	ト	四	月	雨
小	麦	九	ト	五	月	雨
大	麦	二	ト	六	月	雨
小	麦	八	ト	七	月	雨
あ	わ	五	ト	八	月	雨
ひ	え	七	ト	九	月	雨
い	も	七	ト	十	月	雨
な	ね	八	ト	十一	月	雨
た	こ	一	ト	十二	月	雨

萬二十作也 扶桑社
令和七年一月十三日

令和七年の筒粥表

設立三十周年記念事業

◆記念講演会◆

令和七年十月二十五日(土)

午後一時〜

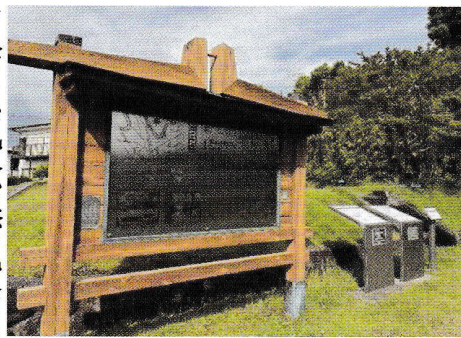
場所 秦野市立本町公民館

二階多目的ホール

演題 「曾屋水道と常滑焼」

講師 小栗康弘氏

とこなめ陶の森資料館学芸員



明治23年に住民の主導で敷設された曾屋水道。現存する配水場跡は、国の登録記念物に登録され、曾屋水道記念公園として開放されている

◆会員記念懇親会◆

記念講演会終了後

※詳細は、チラシをご覧ください。

訃報

当会前副理事長の三留文雄様が、令和七年六月十二日に御逝去されました。謹んで、御冥福をお祈り申し上げます。

◆表紙の題字

「善哉(よいかな・よきかな)」

揮毫 蓑毛山寶蓮寺

三十三世住職 東島光明師

『寶蓮寺真名縁起』によれば、聖武天皇の命を受けた行基と良弁が、伊勢の皇大神宮に赴き大仏造立の願いが叶った時、歓喜して舞い、歌い、言ったことばが「善哉、善哉、時哉、時哉」である。・会報第三号から要約

◆市外研修のお知らせ◆

横浜開港の歴史(港今昔物語)

令和七年十一月六日(木)

場所 横浜税関資料館、横浜開

港資料館、海上保安庁を見学

昼食は横浜中華街でコース料理

貸し切りバス利用

会費 八千円

※別途市内研修として、香雲寺(西田原)・大藤一族の墓所見学を予定しています。それぞれ、詳細はチラシでお知らせします。

発行責任者

秦野市羽根七〇七

小泉 孝

電話 〇四六三―七五―〇〇六七